



# 島根県水産技術センター だより



水産技術センター開所式(平成18年4月4日)

## 目 次

水産技術センター開所によせて	2
水産技術センターの組織図	3
研究の基本方針	4
新組織の紹介	5
研究最前線	8
話題の広場	10
平成17年度 要録	12
職員の配置	13

## 水産技術センター開所によせて

水産技術センター所長 松山康明

今春、県立の試験研究機関について、その役割を明確にしたうえで、目標を絞り込んで効率的な研究開発を行うため組織の再編がなされました。

水産においては、明治34年以来105年の歴史を持った水産試験場と、内水面水産試験場、栽培漁業センターの3機関を統合し「新・島根県水産振興基本構想」に掲げる目標実現に向け、「水産業の持続的発展を目指し、守り、育て、開発しよう、環境、資源、技術、人材」を基本理念にした「水産技術センター」として生まれ変わることとなりました。

第2県土である沖合から中山間に至る広大な地域を調査対象にした「水産技術センター」を待ち受けていますのは、悪化、減少、低迷が続く漁場環境、水産資源、魚価の現状評価と対策に加え、今年も発生が懸念される大型クラゲ対策やコイヘルペスをはじめとした魚病対策など待ったなしの課題の山です。

このため、新たな機関は、従来の施設を有効活用するとともに、それぞれの専門性を生かしながら相互の連携強化により、効率的で、迅速な研究成果の展示に努めていく必要があります。

そこで当面の方針を掲げますと、まずは、沖合から、沿岸、湖沼、河川の漁場環境の情報収集・解析を行い、漁場環境の改善にむけ提言していきます。

次に、水産資源については資源の適正評価と資源管理手法を明らかにするとともに、未利用資源等の有効利用を図るため新たな漁具漁法の導入開発や操業形態の改善策を提言していきます。

つくり育てる漁業の推進については、新魚種開

発を含めた種苗生産技術の確立と放流効果の実証、更には、増養殖技術の開発により漁業生産の安定に寄与します。

低迷する魚価対策としては、鮮度保持の重要性和脂質含量を主体とした成分特性を数値化し、付加価値向上に役立てます。併せて、安全・安心な水産物の提供にむけ衛生管理技術の確立を図ります。また、これらの成果、情報を踏まえながら経営分析を行うことにより、漁業経営の安定にも役立てていきます。

一方、開かれた研究機関を目指し、漁業者を含め多くの皆様方の生の声を反映した研究課題の設定に努めるとともに、研究成果やトピック的な情報をわかりやすくまとめて発信していきます。更に、担い手を対象とした研修活動の参加・協力や、水産の理解者と応援団づくりに向け水環境や水産生物の特性等を教材とした出前、受入講座の開設にも積極的に取り組みます。

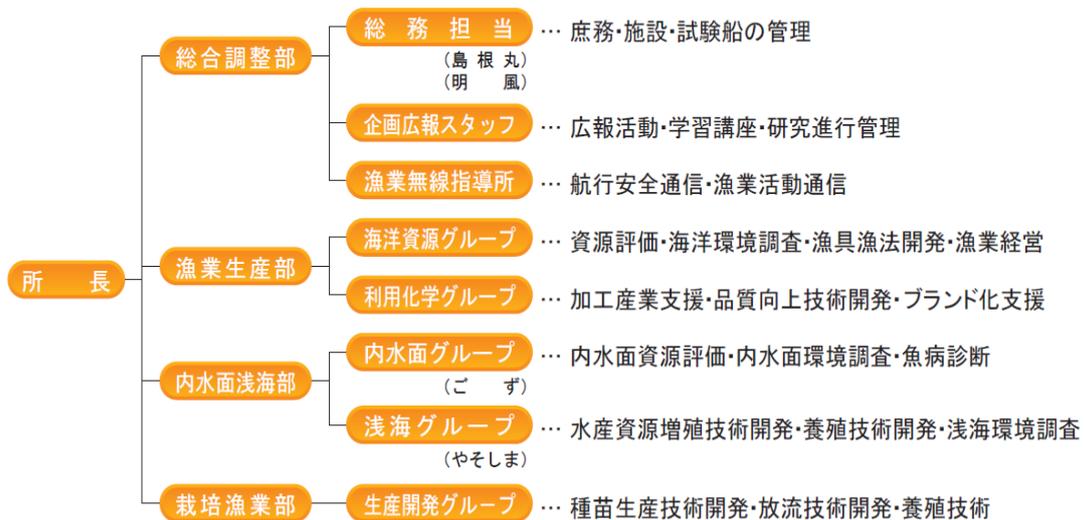
しかし、ここで掲げた方針の成否は、存在感あふれる職場作りに向け、職員の意識の高揚と旺盛なチャレンジ精神に委ねるところが多く「自己満足しない人間の多くは、永遠に前進し、永遠に希望を持つ」との魯迅の言葉を胸にした職員個々の意識改革にかかっています。

また、研究成果の効率化に併せ、従来型の調査研究計画である概算設計的な発想から、詳細設計的な計画策定にシフトしてもらい、コストの意識の徹底と進行管理の充実を期待したいものです。

水天彷徨の彼方に向かう試験船の船出を見送りながら、水産技術センター丸の今後の航行に皆様方のご支援、ご協力をよろしくお願いし開所に当たっての挨拶とします。

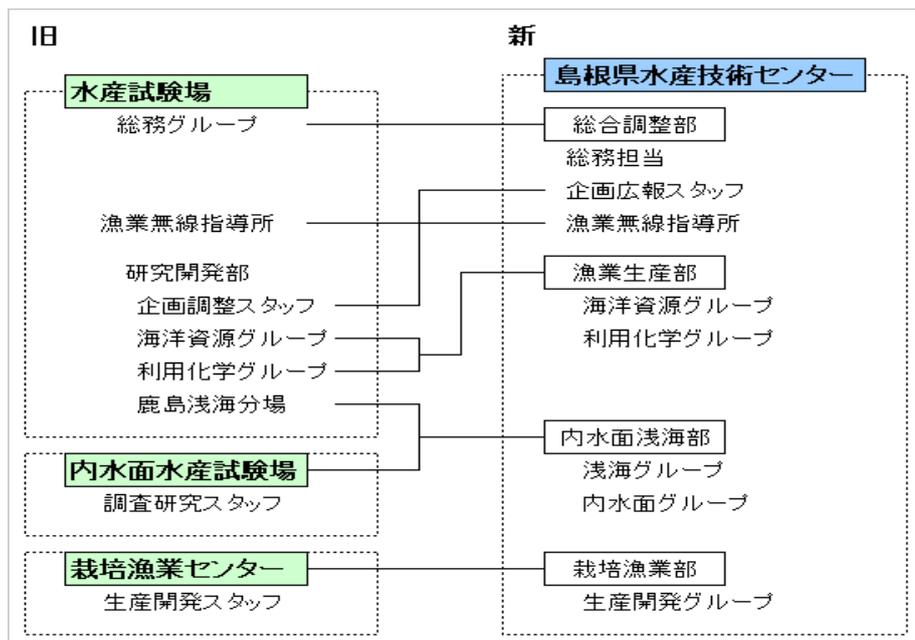
## 水産技術センターの組織図

新しく再編された水産技術センターは4つの部で構成されています。



旧組織との関係は下の図のとおりです。

### 新旧組織対照図



## 研究の基本方針

水産技術センターでは、「新・島根県水産振興基本構想」に基づき「環境」「産業」「地域」の保全と発展を支援するため調査、研究活動と技術開発を行います。

### 「新海洋時代への対応」

#### ○漁場環境に関する調査・研究

沖合から沿岸、湖沼、河川の漁場環境の情報収集、解析、発信を行うとともに、漁場環境の改善について提言します。貴重な財産である汽水域の保全にも寄与します。

#### ○水産資源の評価に関する調査・研究

漁業の対象となっている魚介藻類の資源状況を把握し、資源管理の推進と計画的な生産目標の樹立に役立てるとともに、未利用資源の有効利用に努めます。

#### ○つくり育てる漁業の推進に関する技術開発と研究

栽培基本計画に沿った種苗生産技術の確立と放流効果の実証、更には、増養殖技術の開発により漁業生産の安定に寄与します。

### 「変革する産業・経済構造への対応」

#### ○漁業支援に関する技術開発と研究

新たな漁具漁法の導入・開発や操業形態の改善策の提言を通じて活力ある漁業者の育成に努めます。

#### ○水産物付加価値向上に関する技術開発と研究

鮮度保持の重要性と水産物特有の成分特性を明らかにし、付加価値情報として魚価向上を支援します。また、産学官連携のもと新技

術、新産業創設にも目を向けていきます。

#### ○漁業経営に関する調査と指導

業界、行政等で構成する経営戦略チームの一員として資源状態を反映した経営分析を行い、漁業経営の安定に寄与します。

#### ○安全、安心な水産物の提供に関する調査と指導

時代に即応した水産食品の供給を図るために衛生管理技術の確立を図ります。ユビキタス社会に適応したトレーサビリティ導入を目指す業界等の技術支援をするとともに、魚病や貝毒対策に取り組めます。

### 「共生の時代への対応」

#### ○担い手対策と県民向け学習活動の推進

担い手を対象の研修活動に積極的に参画・協力するとともに、ゆとり教育や生涯学習の一環として水環境や水産生物の学習活動に取り組んでいきます。

#### ○積極的な情報の発信

インターネット等を通じて研究成果やトピックス的な情報をタイムリーに提供していきます。

#### ○業界、地域、行政との連携強化

開かれたセンターを目指し、関係者の意向を踏まえた研究課題の設定や、関係者と一体となった成果の展示に努めます。

## 新組織の紹介

### 【総合調整部】

県民の要望に対応した試験研究を行うための対外窓口として、関係機関との連絡調整や研究の総合調整、情報の収集と発信、研究成果の広報を行います。

「庶務担当」は水産技術センターの施設の管理運営に必要な庶務や財産管理、船舶・車両の運航管理などの事務を担当しています。

「企画広報スタッフ」は島根の水産業や漁海況に関する情報を収集・整理し、広報誌・インターネット・FAXなどで研究成果とともに県民や漁業者に情報提供します。



水産情報の収集・解析

また、関係機関と連絡調整を行い、研究の全体計画を作成したり研究内容の評価検討を行います。さらに、小中学生や県民・漁業者を対象に、水産業や島根の水環境、そこに生息する生き物などについて広く知ってもらうための学習活動を行います。



学習会の開催

「試験船」のうち、総合調整部には島根丸(142トン)と明風(41トン)の2隻が属しています。



島根丸

島根丸は沖合の海洋観測、漁具・漁法の開発等に従事します。明風は沿岸域の漁業資源調査、環境調査等に従事します。



明風

「漁業無線指導所」は24時間体制で主に島根県の沿岸から沖合域の漁船との通信業務、航行の安全確保や漁業活動の支援を行います。



無線通信室での交信

### 【漁業生産部】

水産資源を保護し将来にわたって安定的に利用するための資源管理、海洋観測、漁具漁法、魚介類の利用加工・品質向上などに関する調査研・技術開発に取り組みます。

「海洋資源グループ」は水産資源を保護しながら有効に活用するため、主にまき網や底びき網の漁獲対象となる魚介類について、資源状態を評価するための調査を行います。また、水温・塩分・プランクトンなどの海洋環境の観測を定期的に行います。



沖合域の海洋観測

資源保護のために稚魚だけを逃がす漁具や、網に入って漁業者を困らせるクラゲだけを排出する漁具など、新しい漁具の開発を行います。また、体力が弱くなっている基幹漁業を再生するため、漁業経営を改善する対策を漁業者・金融機関・行政等と一体となって考えます。

「利用化学グループ」は水産加工流通業界に対して技術的な支援を行います。また、産学官で連携して、利用加工に関する新技術の開発や新産業の創出について研究を進めます。

「安心・安全」、「高品質」な水産物を生産するため、漁獲物の鮮度保持などの品質向上技術の開発・普及を官民一体となって行います。さらに

県内各地の水産物のブランド化を支援するため、積極的な技術の導入により、その特性を科学的に明らかにする研究を行います。



魚の「脂の乗り」が測定できる測定器の開発

### 【内水面浅海部】

内水面（湖沼・河川）や浅海域における資源管理の研究や増養殖技術の開発、漁場環境の調査や魚病の対策を行います。

「内水面グループ」は、漁場が限られている内水面でのヤマトシジミやアユの適正な資源管理をするための調査を行います。



アユの稚魚調査

内水面の環境は、生活・産業排水や護岸工事などの影響を受けやすいため、定期的に湖沼・河川の水質調査を行って漁場環境を監視します。

また、魚病はしばしば養殖や天然の魚介類に甚大な被害をもたらします。魚病被害を未然に防ぐために迅速な検査を実施し、治療や対策指導を行います。

「浅海グループ」は浅海域における海藻やアワビやバイなど魚介類の資源の回復と増大を図るため、種苗生産・放流・資源管理などの技術開発を行います。



藻場の潜水調査

養殖業を振興するため、ワカメの種苗生産技術をはじめとして、各種養殖技術の基礎的な技術開発を行っています。

貝毒プランクトンの検査や原子力発電所の影響調査など、食と住環境の安全安心や漁場環境の保全のため調査を行い、広く県民に情報を提供しています。

内水面浅海部にはやそしま（9.1トン）とごず（8.5トン）の2隻の調査船が配属されています。



やそしま(左) と ごず(右)

「やそしま」は浅海域の環境調査や原発温排水調査に、「ごず」は内水面域の漁業調査や環境調査にそれぞれ従事します。

### 【栽培漁業部】

つくり育てる漁業（栽培漁業）を推進するため、魚介類の種苗生産を行うとともに、放流技術・養殖技術の調査研究を行います。

「生産開発グループ」は マダイ・ヒラメ・オニオコゼ・メガイアワビの放流用種苗の大量生産を行います。また、放流後の生き残り率が高い人工種苗を生産するための技術開発を行います。また、種苗放流が漁業に貢献しているか検証するとともに、地域の特性にあったより効果的な放流技術の開発を行います。



イワガキ採苗器の垂下

島根県の新たな特産品である「養殖いわがき」の種苗生産をはじめ、地域に貢献できる養殖業の推進と養殖技術の開発を行います。



栽培漁業部全景

## 研究の最前線

### ～海産アユ生態調査について～

アユと言えば、「清流の女王」、解禁日には腕自慢の太公望がずらりと川にならぶのが初夏の風物詩となっています。島根県では年間 240 トン程度漁獲されますが、これは河川で行われる漁業の漁獲量の約 60% を占め、最も重要な魚種です。

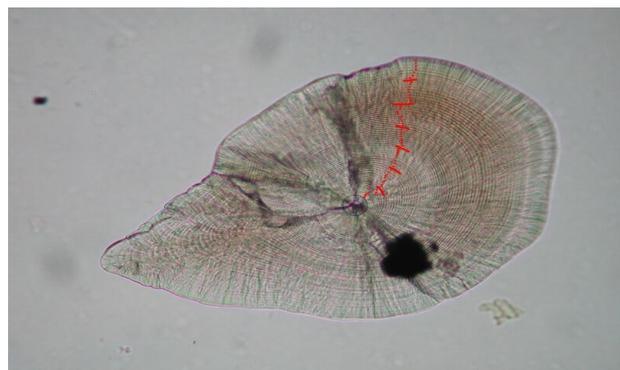
しかし、島根県のアユの漁獲量は、最も多く獲れていた昭和 50 年前後と比べて、約 1/3 以下に減少しました。これは、河川環境の悪化等によって天然魚が減少したためです。このため琵琶湖や他県産の稚アユに加え、人工的に生産された種苗が放流されていますが、平成になって全国に蔓延した冷水病の影響もあって漁獲量は頭打ちとなっています。

内水面浅海部（旧内水面試験場）では、高津川で漁獲されたアユの天然遡上魚と人工産放流魚が占める割合を調査した結果、多い年では 8 割以上を天然魚が占めていることが分かりました。アユの資源を復活させるためには天然遡上魚の動向が大きな鍵を握っているようです。

ところが、下流域の産卵場で生まれた稚魚たちが海に下って冬を越し、翌年の春に川に上って来るまでの生活史が実は良くわかっていません。太平洋側を中心とした最近の調査結果から海に下った稚魚は、波打ち際（砕波帯）などごく沿岸部で生活していることが明らかにされましたが、その間の減耗要因は謎のままです。

内水面浅海部（旧内水面水産試験場）でも、高津川を中心に天然遡上アユの調査は精力的に行ってきており、流下量と遡上量は必ずしも一致しないこと、高津川のアユの発生月は 11 月が中心であること、形態比較により人工産と海産アユの区別は可能であること、11 月から翌年の 3～4 月にかけて益田市の土田の浜から持

石海岸までの砕波帯に稚仔魚が出現することなどが明らかになりました。しかし、海面期の調査に関しては、距離的な問題から十分実施できませんでした。



アユの耳石。1日に1本できる輪を数えてふ化日を判定します（赤の区切線は10日毎に数えたマーク）。

そこで水産技術センターでは効率的な調査体制を構築するため、内水面浅海部と漁業生産部が協力して海面への流下後、砕波帯へ出現するまでの稚仔魚の海面での広がり把握するため、海面稚仔魚分布調査を実施します。さらに、遡上量の多寡を、早期に予測するため、サーフネットによる砕波帯での稚魚分布調査も実施する予定です。これと、従来河川での調査結果とを組み合わせれば、天然遡上するアユの資源動向を捉え、その遡上量を予測する方法も、近い将来見つけられるかもしれません。海と、川の仲間が、手を取り合って頑張りたいと思います。

### ～中海でアオノリ養殖に成功！～

アオノリ（スジアオノリ）は海水と淡水が混ざり合う汽水域に生育する海藻です。徳島県吉野川や高知県四万十川が有名な産地で、料亭や和菓子などの高級食材やお好み焼き・たこ焼きの振りかけ用として根強い需要があります。一

般にアオノリと言えば粉状のものを思い浮かべますが、原藻の姿そのままを素干しにしたものは高級品として扱われ、キロ単価は5千円前後します。

平成13年度から中海水産振興策の一つとして、アオノリ養殖の研究に取り組み、揖屋・大海崎から安来にかけての中海南岸で特に品質の良いアオノリが収穫出来ることが分かりました。15年度からは普及を視野に入れ、中海の漁業者と松江水産事務所が加わり、採苗・育苗・養殖・加工までの技術研修を実施し、試作品として数種類を製品化しました。更に、17年度には漁業者が「青のり研究会」を発足し、アオノリ専門業者2社に収穫物の品質評価を依頼し、全国レベルにおいて「色が濃く、藻体の幅が細く、天日干し乾燥物」については、一級品に属するものと評価頂きました。また、製品化した天日干し品を県物産館（40袋）と地元の温泉



試験販売した天日素干しアオノリ

施設（20袋）で観光客や地元の人を対象に試験販売（5g入り、350円）を行なったところ、翌日には完売するという幸先のよいスタートを

切りました。購入して頂いた方々のアンケート調査によると、概ね好評で高い評価と継続販売を希望する声も寄せられました。

平成17年度、今までの調査研究結果をもとに、アオノリの養殖についてわかりやすく解説した「中海におけるアオノリ養殖マニュアル」を作成しました。平成18年度は試験販売の継続（600袋作製予定）を行うとともに、一層の製品の安定生産と漁業者への技術移行を進め、漁業者主体の養殖体制作りを図る計画です。

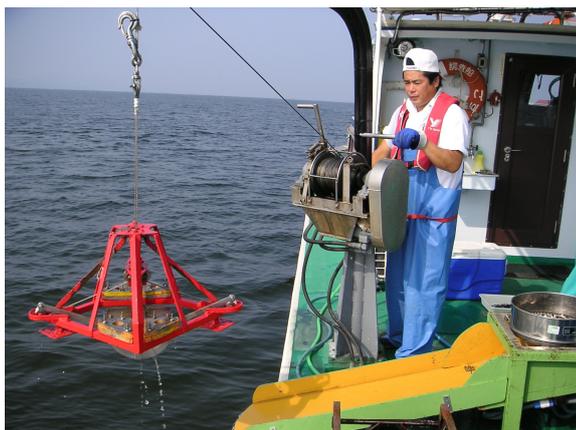
この取り組みはまだ始まったばかりで難問は山積していますが、努力が実りいつの日かアオノリが中海の特産品の一つとなれば幸いです。

#### ～中海の浅場調査始まる～

中海淡水化事業に着手したのが昭和38年（1963年）4月。それから42年の歳月を経て、今回、2008年を目途に森山堤防開削、西部承水堤撤去が実施されることとなりました。そこで、内水面浅海部では堤防開削後の水産振興策を速やかに打ち立てるため、今年度から5年間かけて本庄水域を中心とした中海に生息する有用魚介類の基本調査を行うことになりました。

かつて、中海は魚介類、藻類などが豊富な水域であり、魚類のほか、寒天原料のオゴノリ（オゴ草）やサルボウ（もがい）、アサリなどを含め、多いときには年間1万トン近い水揚げがありました。しかし、現在は干陸工事に伴う堤防設置、埋め立てなどによる漁場環境の変化によって、漁獲量は急激に減少し、近年では数百トンまで落ち込んでいます。

今回実施される堤防開削、承水堤の撤去により、本庄水域は堤防設置前には及ばないものの今までと比べかなり潮通しが良くなり、漁場環境が改善されることが期待され、現在再生産が確認されているアサリについても、現状より生き残りが良くなり、資源が回復することが予想



採泥器による底生生物の採集

されます。また、本庄水域には産卵場、育成場となるべく浅場が広範囲に広がっているうえ、外海と繋がることから産卵に併せ多くの魚介類がこの水域に入り込み、この海域で産卵が行われ、様々な種類の魚介類の資源が増えることも期待されます。

そこで、まずは主要漁業であるマス網、刺網、採介藻漁業の実態を把握するため、どのような漁具で、どんな魚介類がいつ、どこで、どれだけ獲られているのかということ漁業者の方の協力を得ながら調査し、中海の利用実態を把握します。そして今回はかつてたくさん漁獲されていたアサリ、サルボウに焦点を絞り、中海のどの辺りにどれだけ生息しているのかといった分布調査や漁獲物の買取りにより産卵実態などを把握し、増養殖手法の展開を図るための基礎資料の収集を行います。また、かつて盛んに行われていたサルボウの天然採苗を行い、天然採苗の有効性、増殖手法の検討を行います。これらの調査結果をもとに、本庄水域の有効活用方法を検討し、かつての魚介類の豊富だった中海が蘇えるよう、その手助けができればと考えております。

## 話題の広場

### ～ヒラメ種苗出荷開始！～

隠岐郡西ノ島町にある栽培漁業部では、平成18年1月17日より4月からの出荷に向け、万全の体制で生産に取り組んでおります。

今年は約64万尾（全長30～40mm）の出荷が予定されていますが、現在水槽の中では出荷出来る大きさとなった稚魚が出荷は未だかと待っている状況です。

ここで生産したヒラメの稚魚は県内各地の中間育成施設に運ばれ、そこでさらに2ヶ月間ぐらい大きさ80mmになるまで育てられ、6月から7月にかけて放流されます。

ヒラメ種苗の生産では、表面が白かったり裏面が黒くなる、“色素異常の発生”が大きな問題とされていて未だ明確な予防策は無く、全国の種苗生産施設でも改善のため試行錯誤が行



種苗生産されたヒラメの稚魚

## No. 1 Apr. 2006

われていますが、栽培漁業部ではこれまでに飼育方法や初期餌料の改善によって、全国でもトップクラスの良質なヒラメ種苗の生産を行えるようになりました。

今年のヒラメ種苗についても、非常に活力があり、色素異常についても天然と見分けがつかないぐらい極めて軽微となっております。

まもなく栽培漁業部からヒラメの稚魚が出荷されるわけですが、今年の7月頃には島根県各地の海岸（砂浜）で放流されたヒラメの稚魚がたくさんみられます。2年後にはヒラメの稚魚も50cmぐらいに成長し、漁師さんが漁獲して市場に出荷されます。

### ～水試フェアの開催と今年の予定～

平成17年8月3日、松江市の島根県民会館において水産試験場、内水面水産試験場、栽培漁業センターの水産試験研究機関合同で「水試フェア」を開催しました。

「水と魚を考える」というテーマで、研究成果報告会、夏休み子供教室及びパネル展示の3つを企画しました。研究成果報告会では4課題の発表がありましたが、1つは大型クラゲを排出する底びき網の開発についての報告で、過去最悪の大型クラゲ来遊が予想されていたこともあり、時機を得たものでした。



パネル展示コーナー

夏休み子供教室では海藻おし葉の作り方、水生昆虫の観察、ロープの基本的な結び方を開催しましたが、家族連れの来場者も多く、どれも大変好評でした。展示コーナーでは研究機関の活動や研究紹介のパネル展示、タッチプール、海や魚に関するクイズラリー、ゲーム、試食・販売など多種の催しが行われました。

今年度は名称も「水産技術センターフェア」とし、「海の日」を記念して7月17日、浜田市を会場に開催準備を進めているところです。水産技術センターの業務紹介や研究成果等を分かりやすく紹介したり、施設を利用した体験学習や各種教室、試験船や漁業無線指導所の一般開放等も企画しています。具体的な内容が決まれば皆さんに広く周知したいと考えていますので是非ご来所ください。

### ～韓国語会話講座の開催～

平成18年2月15日から3日間、旧水産試験場職員を対象にした韓国語会話講座を開きました。これは、調査船「島根丸」で竹島近海に海洋観測のため出向いた時、韓国側から船名や行き先などを尋ねられることもあり、韓国語をマスターしようという今回の講座を企画しました。

講師には浜田市嘱託職員の李チャマさんを招き、職員は熱心に発音を繰り返していました。



会話を指導する講師

## 平成 17 年度 要 録

## ○関係した主要会議

期 日	名 称	担当部署
平成 17 年 4 月 7 日	光触媒水鮮度保持試験結果検討会	利用化学G
4 月 26 日	「どんちっちマアジ」の認証判定会議	利用化学G
4 月 26、28 日	ワカメ生産試験結果報告会	鹿島浅海分場
5 月 6 日	アオノリ漁業者検討会	内水面水産試験場
5 月 11 日	原子力発電所周辺環境放射線等測定技術会温排水部会	鹿島浅海分場
5 月 21 日	小型底びき網パイ・アナゴ部会	海洋資源G
6 月 16 日	研究課題検討会	企画S
6 月 18 日	小型底びき網総会	海洋資源G
6 月 21 日	浜田市ブランド化戦略会議総会	利用化学G
6 月 30 日	養殖アワビ大量へい死検討会	鹿島浅海分場
7 月 14 日	内水面調査研究協議会・研究課題検討会議	内水面水産試験場
7 月 14 日	研究課題検討会議	栽培漁業センター
7 月 29 日	浜田沖合底びき網船主・漁労長会	海洋資源G
8 月 11 日	原子力発電所周辺環境放射線等測定技術会温排水部会	鹿島浅海分場
8 月 16 日	大型クラゲ対策網説明会	海洋資源G
8 月 18 日	大型クラゲ対策会議及び漁海況報告会	海洋資源G
8 月 30 日	第 1 回宍道湖中海水産振興対策検討委員会	内水面水産試験場
9 月 2 日	浜田中型まき網漁海況報告会	海洋資源G
9 月 10 日	小型底びき網役員会	海洋資源G
9 月 12 日	イワガキ種苗供給調整会議	栽培漁業センター
9 月 26 日	第 1 回農林水産試験研究機関 場・所長会議	水産試験場
10 月 7 日	宍道湖ます網役員会	内水面水産試験場
10 月 20 日	バイオマス飼料評価検討会	利用化学G
11 月 15 日	原子力発電所周辺環境放射線等測定技術会温排水部会	鹿島浅海分場

期 日	名 称	担当部署
11 月 22 日	アオノリ養殖漁業者検討会	内水面水産試験場
12 月 21 日	加工技術情報検討会	利用化学G
平成 18 年 1 月 18 日	アオノリ養殖漁業者検討会	内水面水産試験場
1 月 28 日	大型クラゲ対策小型底びき網漁具説明会	海洋資源G
2 月 14 日	原子力発電所周辺環境放射線等測定技術会温排水部会	鹿島浅海分場
2 月 17 日	宍道湖漁協蛸組合委員会(シジミ調査結果報告)	内水面水産試験場
2 月 20 日	地域課題解決推進会議(アワビ養殖)	鹿島浅海分場
3 月 13 日	神西湖シジミ研究報告会	内水面水産試験場
3 月 14 日	中国五県共同研究会議(藻場造成技術確立)	鹿島浅海分場
3 月 16 日	アオノリ体験養殖試験の進め方検討会	内水面水産試験場
3 月 22 日	宍道湖漁協蛸組合総会	内水面水産試験場
3 月 23 日	第 2 回宍道湖中海水産振興対策検討委員会	内水面水産試験場

## ○ 実施・関係した研修会

期 日	名 称	担当部署
5 月 10、11 日	ワカメフリー配偶体種苗生産技術研修会	鹿島浅海分場
5 月 12、17、31 日	アオノリ加工研修会	内水面水産試験場
5 月 17～19 日	ワカメ学習会	鹿島浅海分場
5 月 25、26 日	イワガキ養殖研修会	栽培漁業センター
6 月 20、21 日	マイアワビ養殖研修会	栽培漁業センター
6 月 25 日	和江漁協加工工場衛生管理実態調査報告	利用化学G
6 月 28 日	畜養マアジ品質評価研修	利用化学G
7 月 11～14 日	ワカメ学習会	鹿島浅海分場
7 月 11 日	アカムツ脂質測定技術研修会	利用化学G

期 日	名 称	担当部署
7月12日	和江漁協衛生管理研修会	利用化学G
7月28日	アオノリ漁業者研修会	内水面水産試験場
8月23～25日	ワカメ学習会	鹿島浅海分場
9月13日	和江漁協婦人部加工研修会	利用化学G
9月16日	アワビ養殖現地指導研修	鹿島浅海分場
10月4～6日、12、19、26日	ワカメ学習会	鹿島浅海分場

期 日	名 称	担当部署
11月12日	アワビ放流技術研修会	鹿島浅海分場
12月21日	食品表示関係機関研修会	利用化学G
平成18年1月14日	大型クラゲ防除網研修	海洋資源G
3月14日	アオノリ養殖網採苗実習	内水面水産試験場
3月20日	アオノリ養殖研修会	内水面水産試験場

## 職 員 の 配 置

センター所長		松山康明		主任研究員	福井克也
総合調整部 (総務担当)	部 長	角 久夫	内水面浅海部 (内水面G)	主任研究員	曾田一志
	主 幹	昼沢和善		部 長	田中伸和
	主 任	市居由加里		科 長	河原 彰
	主任施設管 理技師	野原光雄		主 幹	内田和広
(企画広報)	主任庁務員	青笹光祐		専門研究員	三浦常廣
	主席研究員	森脇晋平		専門研究員	石田健次
	専門研究員	向井哲也		専門研究員	安木 茂
(島根丸)	船 長	藤江大司	(浅海G)	主任施設管 理技師	江角陽司
	一等航海士	山本修巳		科 長	後藤悦郎
	航海士	中嶋清栄		専門研究員	柳 昌之
	航海士	前田博士		専門研究員	道根 淳
	甲板員	小野充紀	(やそしま)	専門研究員	堀 玲子
	機関長	新家浅夫		船 長	木村 秀
	一等機関士	梢江哲夫	栽培漁業部 (生産開発G)	機関長	青山喜久雄
	機関士	木下一徳		部 長	加茂 司
	通信長	小松原雄二		科 長	山根恭道
(明風)	船 長	濱上伸夫		主 任	早水 敦
	航海士	西村雅之		主任研究員	開内 洋
	機関長	砂廣秀人		主任研究員	為石雄司
	通信長	西藤秀夫		主任研究員	栗田守人
(無線指導所)	所 長	鳥落修身		主任研究員	細田 昇
漁業生産部	部 長	由木雄一		主任施設管 理技師	角谷延次
(利用化学G)	科 長	藤川裕司		主任管理技師	奥田 進
	専門研究員	清川智之		主任管理技師	常磐 茂
	主任研究員	岡本 満		主任管理技師	近藤徹郎
(海洋資源G)	科 長	村山達朗		主任管理技師	大濱 豊
	専門研究員	佐々木正			

栽培漁業部  
浦郷港から車で10分  
七類からフェリーで2時間35分

内水面浅海部 浅海グループ  
松江駅から車で30分

総合調整部・漁業生産部  
浜田駅から車で10分  
萩・石見空港から車で60分

内水面浅海部 内水面グループ  
出雲空港から車で10分  
出雲市駅から車で30分

水産技術センターだより第1号

平成18年4月21日

島根県水産技術センター

島根県浜田市瀬戸ヶ島町 25-1

TEL(0855)22-1720 FAX(0855)23-2079

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/>

E-mail: [suigi@pref.shimane.lg.jp](mailto:suigi@pref.shimane.lg.jp)